

夏も真つ盛りである。現世から隔離された幻想郷でセミが一週間の生を謳歌し、やかましく鳴き続けている。ましてや幻想郷の中でも魔法の森の中にいるセミは格別にうるさい。

魔法の森の外れにある古道具屋、香霖堂の店主である所の森近霖之助はそんなうだるような暑さすら気にしていられなかった。

「まいったな、いつもは放っておいても入り浸るのに必要な時ほとんど来ないなんて……」

無人の住居兼店舗の中をブツブツと呟きながら歩き回る。

客が誰も来ないという状況であるが、それはいつもの事。霖之助を悩ます事柄は別にあつた。腕を組みながら店内を何度往復したのか解つたものではない。

事の始まりは簡単である。

霖之助は古道具店を営んでいるが、来客はほぼゼロと言つても差し支えは無い。

立地も悪ければ品揃えも来客向けではない。そもそも幻想郷の人間が決して安全とは言えない魔法の森に踏み込む事はないし、品揃えに至っては霖之助が拾つてきた使用方法もわからない外の世界で不要になつた

品なのである。

加えると、霖之助自身ですら自らの店の商品を「趣味だから売らない事にした」などとのたまう事もよくある話であつた。

ともあれ、香霖堂の主な仕入れ方法は『外の世界から流れ着いた物を拾ってくる』事である。その外の世界から流れ着いた物が溜まる場所、そこに一匹の妖怪が住みついてしまったのだ。

霖之助は幻想郷の住人で、しかも半妖であるが、妖怪退治ができる類の人間ではなかつた。彼の能力は「物の名前と用途が判る程度の能力」であり、荒事に向かないという彼自身の自覚は正しい。

だからこそ霖之助は妖怪退治のできる人間として、いつもだったら放っておけば来るはずの博麗霊夢が、霧雨魔理沙に頼もうと思つていたのだ。報酬としてツケの何割かを減らしてやればいいかなどという考えの元、彼女らの来訪を待つていたのだが、こういう時に限つて二人ともやつてこない。ならばこちらから出向こうかとも考えるが、霊夢の住む博麗神社は遠く、魔理沙の住む家は魔法の森の奥にあり、迂闊に迷つたらそれこそ最後である。

「どうしたものか……」

からん、からん。

霖之助の思考を打ち破るようにして、来客を告げるベルが軽やかな音を立てた。

「こんにちわ」

「やあ、いらつしやい」

ベルと同じような涼やかな声が店内を吹きぬける。

トレードマークの洋傘をぶら下げて現れたのは、果たして人ではなかった。長いブロードヘアーを優雅に風にそよがせながら、口元には余裕たつぷりの微笑み。少女のようであり、また妖艶な美女を思わせるようなたたずまい。目の当たりしたところで何者なのか判別しかねる印象を与えるのは隙間妖怪、八雲紫である。

「珍しいですね、貴女が来店なさるとは」

「大した用はないのですけどね」

猛暑の日中だというのにその名のような紫のゴシック調ドレスを着ながら、汗一つかかずに涼しげな顔をしている紫を見ながら、霖之助は内心で少しばかり眉をひそめる。

「久方ぶりに貴方がどうしているのか気になったのですわ」

「はあ……そうですか」

八雲紫といえば大妖怪である、という知識は稗田阿求によってしたためられた幻想郷縁起により、広く知られている。

しかしながら「実際にはどういう妖怪なのか」というのは実はあまり知られていない。そもそも神出鬼没であり、普段をどこで過ごしているのかすら知られていないのだ。広くはない幻想郷であるが、そのどこにでも彼女はいるし、そのどこにも彼女はいない。

「実は少し困った事になっていましてね」

「客が来ないのはいつもの事ではないのですか？」

境界を操る程度の能力と幻想郷縁起に記されているが、それがどういった事なのか、具体的には何ができるのか、妖怪の中でもことさらに博識で、何もかもを見据えたような口ぶりの彼女は常にミステリアスである。ぶっちゃけると、胡散臭い。

「それはいつもの事ですが、今はそれ以外の事で困っているんですよ」

「あらまあ、いったいどうなされたのですか？」

そんな紫に事情を説明するべきなのか、少し迷う。

しかしながら紫は妖怪の賢者とも言われる存在。その知恵に頼るのもいいかもしれない、と思いついて霖之助は事情を説明した。

外の世界の物が流れ着く場所に妖怪が住みついてしまった事。

妖怪特有の気を感じ、一目散に逃げ出したためにそれがどんな妖怪かもわからない事。